第六講『曾我物語』（軍記物語）

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

かかるほどに、やうやく積もり行く年月なれば、箱王も十七歳にぞなりにける。九月上旬の頃、別当、宣ひけるは、箱王殿、今年の授戒には法師になり給ふべし。童（わらは）にて、物の具どもも見苦しくて上り給はば、憚（はばか）りあり。法師になり給はば良かりなむとて、大衆（だいしゅ）にこの由を触れられけり。すでに明日、法師になさむとするあひだ、箱王、心の中に思ひけるは、こは、いかがすべき。明けても暮れても、ただ祐経（すけつね）がことのみ思ひゐたり。たとひ法師になるとも、学問・勤行（ごんぎやう）もこのことを思ひ出だし、あはれ、男になりて十郎殿と連れ奉り、敵（かたき）を討つべきものをと心憂きことに思ひなば、かへりて罪業（ざいごふ）となりぬべし。ただ一向に思ひ切りて本意を遂ぐべし。言ふに甲斐なく髪を剃ぎ離されて後は、千度百度[1]悔ゆとも益あるまじ。善悪、十郎殿と申し合はせて、ともかくも思ひ定めむと、箱王はただ一人、泣く泣く箱根の御山を出で、よもすがら、[2]曾我の里へと下りけり。

十郎が方に行きつつ、呼び出して逢ひにけり。十郎これを見て、いかに、ただ今、何事におはしたるぞと言ひければ、箱

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

王、泣く泣く申しけるは、すでに明日、法師になるべきにて候へば、いかやうにも申し合はせ奉り、ともかくも計らはむために下り候ふと語りければ、十郎、我もさと聞きつれば、うち上りて御有様をも見ばやと思ひつれども、なかなか目も当てられじと思ひて、思ひも立たず、ただ独り[a]泣きゐたるところに、嬉しくも[b]おはしたりとて、袖を合はせて泣きけり。

箱王、涙を押さへて、出家の儀、母の御本意にて候へば、その儀を存じて年来(としごろ)も罷(まか)り過ぎ候ひつ。一年、鎌倉殿、御二所詣での時、敵左衛門尉(さゑもんのじよう)を一目見しより以来(このかた)、片時(へんし)もその面影を[c]忘れず候ひき。経を読み行法(ぎやうぼふ)を営めども、その面影を思へば心も空になりて善心もさらに身に添はず、飲酒を行ふ折節も、その心だにも出で来たれば、胸塞(せ)き心迷(まど)ひて山海の珍物もその味を知らず。それにつけても、父の御跡のみ恋しく、たとひ法師になり候ふとも、この悪念やむことなくば、なかなかかへりて父の御為にも我身の為にも罪業となりぬべく覚え候ふなり。明日、法師になるべく候へば、さだめて[d]御登山候はむと[3]待ち参らせ候へども、その儀もなく候ひつるあひだ、とかく申し合はせ奉らむと、人にも知らせず深山の中をただ独り[e]罷り下り候ふ道すがらも、峰に登る時は父の恩の高きことを思ひ出だし、谷へ下る時は母の徳の深きことを嘆き、そぞろに涙も留まらず候ふ。漢(から)の国の中鳴が七歳にて父の跡をたづねて南蛮へ越えし思ひ、非赤山が九歳にて契丹の国へ赴き

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

し悲しみも、我が身の上に思はれ、袂も袖も濡れ果てて罷り下り候ひぬと語りければ、十郎聞きもあへず声を合はせて泣きにけり。

（『曾我物語』による）

〈注〉
別当…寺の最上級職
授戒…仏門に入る者に戒律を授けること
物の具…衣装
大衆…多くの僧たち
鎌倉殿…源頼朝
行法…仏道の修行

問一　傍線部１「悔ゆ」とあるが、何を悔いるのか。その内容として最も適当なものを一つ選べ。

1　髪を剃ぎ落してしまうこと
2　見苦しい身なりで都に上ること
3　敵の祐経を討たないこと
4　学問・勤行が十分にできないこと
5　元服できないこと

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部２「曾我の里へと下りけり」とあるが、そのようにした理由として最も適当なものを一つ選べ。

1　明日には法師になる予定であるが、法師になった後の学問をどのように進めるか考えておかなければならず、それについて打ち合わせるため

2　明日には法師になる予定であるが、法師になるためには髪を剃ぐ必要があり、それが嫌であるため、うまく避ける方法を見出そうとして

3　明日には法師になる予定であるが、法師になる前に父や母への感謝の気持ちを思い起こす必要があると考え、険しい山道を辿ろうとして

4　明日には法師になる予定であるが、飲酒や山海の珍味などに対する執着から逃れられないので、なんとかそれを振り払うため

5　明日には法師になる予定であるが、もし法師になってしまえば敵を討つことができなくなるので、どうしたらよいか相談するため

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　波線部ａ～ｅの動作の主体は誰か。その組み合せとして最も適当なものを選べ。

	a	b	c	d	e
1	箱王	十郎	十郎	箱王	十郎
2	十郎	十郎	箱王	箱王	十郎
3	十郎	箱王	箱王	十郎	箱王
4	箱王	箱王	十郎	十郎	箱王
5	箱王	十郎	十郎	十郎	箱王
6	箱王	十郎	箱王	箱王	十郎
7	十郎	箱王	十郎	箱王	箱王
8	十郎	箱王	箱王	十郎	十郎

問四　傍線部３「待ち参らせ候へども」を現代語に改めよ。ただし、十五字以内とし、句読点等も字数に含むものとする。

問五　傍線部４「語りければ」とあるが、この発話の最初の五字をそのままの形で抜き出して記せ。ただし、句読点等も字数に含むものとする。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部５「聞きもあへず」とあるが、その意味として最も適当なものを一つ選べ。

1　聞き入れてくれずに
2　聞こえないように
3　聞くやいなや
4　聞き終わらないうちに
5　聞くかと思いきや

※補足

【旧暦一月～十二月】

睦月（むつき）・如月（きさらぎ）・弥生（やよひ）・卯月（うづき）・皐月（さつき）・水無月（みなづき）・文月（ふ（み）づき）・葉月（はづき）・長月（ながつき）・神無月（かんなづき）・霜月（しもつき）・師走（しはす）

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第六講　『曾我物語』（軍記物語）

①「卯月」、「長月」とは、それぞれ旧暦何月に当たるか。次の中から最適なものを一つ選べ。

ア　二月―七月　　イ　四月―九月　　ウ　五月―九月
エ　五月―十月　　オ　四月―十月

②「なかなか事うるはしければ」の解釈として最も適当なものを、次の中から選べ。

A　驚くくらいに飾り物が美しいので
B　仰々しいほどに儀式が煩雑なので
C　かえって物事がきちんとしすぎなので

③「袖を濡らす」の意味として、正しいものを次の中から選べ。

ア　泣く　　イ　家事をする　　ウ　貧しくなる　　エ　感激する　　オ　恋をする

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講

〔解答〕

問一　3　**問二**　5　**問三**　3　**問四**　お待ち申し上げていましたけれど（十五字）

問五　出家の儀、　**問六**　4

〔現代語訳〕

こうしているうちに、だんだんと過ぎてゆく歳月なので、箱王も十七歳になった。九月上旬の頃、別当が、おっしゃったことには、「箱王殿、今年の授戒では法師におなりなさい。童の姿で、衣装なども見苦しく都にお上りになったら、差し障りがあります。法師におなりになったらよいでしょう」と言って、多くの僧たちにこのことをお知らせになった。いよいよ明日、法師にしようとするので、箱王は、心の中で思ったことには、「これは、どうしたらいいだろうか。明けても暮れても、ただ（敵の）祐経のことばかり考えている。たとえ法師になっても、学問・勤行の時も思い出し、ああ、元服して十郎殿とご一緒申し上げて、敵を討てばよかったのにとつらいことに思ったならば、かえって罪業となってしまうだろう。ただ一途に思い切って願を遂げよう。不甲斐なくも髪を剃られてしまっては、千度百度悔やんでもどうしようもないだろう。なにはともあれ、十郎殿と相談して、どのようにでも決心しよう」と、箱王はただ一人、泣く泣く箱根の山を出て、一晩中かけて、曾我の里へと下って行った。

十郎の所に行って、呼び出して会った。十郎は箱王を見て、「どうして、今、何をしにいらっしゃったのか」と言ったので、箱王が、泣きながら申し上げたことは、「いよいよ明日、法師になることになりましたので、どのようにしてもご相談申し上げて、なんとでも取り決めるために（山を）下りました」と語ったので、十郎は、「私もそのように聞いたので、（山に）登ってご様子を見たいと思ったのだが、かえって見ていられないだろうと思って、決心できず、ただ一人で泣いていた所に、嬉しくもいらっしゃった」と言って、袖を合わせて泣いた。

箱王は、涙をこらえて、「出家のことは、母のお望みでございますから、そのことを思って長年過ごしてきました。先年、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

鎌倉殿〔＝頼朝〕が、御二所詣での時、敵の左衛門尉を一目見たときから、片時もその姿を忘れることはありませんでした。経を読み仏道修行をしていても、その姿を思い出すと心も上の空になって修行の心もおろそかになり、食事をする時も、その心さえ起きてくると、胸がふさがり心は乱れて山海の珍味もその味がわかりません。それにつけても、父上のことばかり恋しく思われ、たとえ法師になりましても、この悪念がなくならなければ、むしろかえって父上のためにも自分のためにも罪業となってしまうように思われます。明日、法師になることになっていますので、（兄上は）きっと山に登ってこられるでしょうとお待ち申し上げていましたけれど、そんなこともございませんでしたので、あれこれとご相談申し上げようと、誰にも知らせず深山の中をただ一人で下ってまいります道中も、峰に登る時は父の恩の高いことを思い出し、谷へ下る時には母の徳が深いことを嘆き、むやみに涙が流れて止まりませんでした。漢の国の申鳴が七歳で父の後を訪ねて南蛮へ行った思い、非赤山が九歳で契丹の国へ赴いた悲しみも、自分のことと思われ、袂も袖もすっかり濡れて下ってまいりました」と語ったので、十郎は聞き終わらないうちに（箱王と）声を合わせて泣いてしまった。

〔**重要単語**〕

○のぼる【上る・登る・昇る】…①**地方から都へ行く**。②**宮中へ参内する**。貴人のもとに参上する。③高いところへ行く。④官位・官職が高くなる。

○よもすがら…**一晩中**。↕ひねもす…朝から晩まで。一日中。

○なかなか…①**かえって**。②なまじっか。

○そぞろなり…①何という理由もない。②**関係がない**。③**むやみやたらである**。④心が落ち着かない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第六講　『曾我物語』（軍記物語）

〈解説〉

①「睦月（むつき）・如月（きさらぎ）・弥生（やよひ）・卯月（うづき）・皐月（さつき）・水無月（みなづき）・文月（ふ(み)づき）・葉月（はづき）・長月（ながつき）・神無月（かんなづき）・霜月（しもつき）・師走（しはす）」を覚えること。

②「なかなか」＝「かえって」の意味。よって、正解はC。

③「袖を濡らす」は「涙で袖を濡らす」意から「泣く」。よって、正解はア。

※「袖の雫」、「袖の露」＝袖にかかる涙。「袖を絞る」＝涙に濡れた袖を絞る。涙をひどく流すこと。

〈解答〉

①　イ　②　C　③　ア

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。